Zwei Kilo Mehl (sind/ist) viel zu viel für den Teig.
－「数量句＋基礎名詞」の数はいかに決まるか－

吉田 光演・筒井 友弥

０．序　文法数の問題*

数の区別のない日本語の話者には，ドイツ語の名詞の数の用法は容易ではない。相手に子供がいるか聞く時は„Haben Sie Kinder?“と複数で尋ねる方がよい(*ein Kind* だと「子供は一人」という予断があることになる)。しかし，「ペンを貸して」と依頼する場合は„Haben Sie einen Stift?“と単数を使うべきだろう(１本あれば十分)。このように，数の区別は発話文脈や言外の知識等，語用論にまで広がる大きな問題である。これを確認した上で，我々が携わるドイツ語教育の場でまず必要なのは，次のような冠詞原則を把握することだろう。冠詞範疇のない日本語の話者は名詞に冠詞を付加することを忘れがちであるからだ。

(1) 冠詞の原則：可算名詞(単数)には冠詞(der, das, die, ein, eine, …)をつける。

例：Das ist ein Handy. Das Handy ist neu.　(vgl.*Das ist Handy. *印=非文法的)

次に重要なのは可算・不可算の違いである。不可算名詞は単数形だが，数の区別（複数）がない。例えば, *Bier*, *Salz*, *Gas* などの物質名詞は液体，粒子，気体を表し，均質的(homogen)で，個体の単位性(minimale Einheit)が希薄という不可算名詞の特徴を満たすので理解しやすい。一方, *Obst*/**ein Obst* (集合名詞は不可算), *Holz*/*ein Holz* (素材としての木，１本の薪：可・不可算)のような語は存在論的区別では説明しにくく，個々に学ぶ必要がある。

しかし，ドイツ語母語話者でさえ判断しにくく揺れを起こす数の用法もある。次の例は，ドイツのある Web サイトで動詞の数について議論された例文の一部である。

(2) Eine Menge Apfelsinen (liegen/liegt).../ Zwei Kilo Mehl (sind/ist) viel zu viel für den Teig.

(http://www.deutsch-als-fremdsprache.de/austausch/forum/read.php?4, 34642)

このように名詞に *eine Menge* のような数量表現がつくと名詞句の数がどうなるか，主語・動詞の一致がどうなるかということは，ドイツ人にとっても厄介な問題である。名詞句の主部(中心)を名詞として見るか数量句として見るか，名詞句の指示対象を個々の断片と見るか全体と見るかによって数の判断も変わる。その区別は構文や日常会話・書き言葉によって揺れる。そこで，本論ではこの問題を考察し，数量句表現と複数・不可算名詞に焦点を当てて，名詞句全体の数の決定要因について統語的・意味的観点から考察したい。

１．[数量句＋基礎名詞]型複合名詞句の統語特性

数詞と単位度量衡表現を数量句(Mengenangabe), 元の名詞を基礎名詞(Bezugsnomen)とすると, 基礎名詞の統語形式には, (3)のように属格や前置詞句, 同格など４通りある。

(3) a. 2 Liter der Milch (そのミルク中の 2 リットル) → 定属格・部分構造 (Partitiv)

b. 2 Liter frischer Milch (新鮮な 2 リットルのミルク) → 不定属格(Genitiv)

c. 2 Kilo von Kartoffeln (2 キロのジャガイモ) → *von* 不定名詞句（前置詞句）

d. 2 Kilo Kartoffeln (2 キロのジャガイモ) → 部分同格 (partitive Apposition; Duden 2006)

(3a)の部分構造は, 定冠詞がついた属格名詞句が数量句を修飾する点で他のタイプと異なる(既知の特定の量の中の一部分を表す)。そこで(3a)は除外する。(3b)(3c)(3d)は意味的に似ているが(不定量でよい), 属格の(3b)と *von* 名詞句の(3c)は, 従属関係において名詞句全体の主部が数量句であることは明確である。問題になるのが(3d)の同格タイプだが, この場合数量句が主部なのか基礎名詞が主部なのかが不確かで, 数も単数か複数かで揺れる。そこで, 本論では主に(3d)タイプの同格表現を論じる。同格タイプの中で, 数量句と基礎名詞の特徴によって更に下位分類される。基礎名詞の側では *Äpfel* のような複数可算名詞と *Butter* のような不可算名詞に分かれる。数詞も, 単数を表す *ein*/*eine* と複数を表す *zwei* 以上の数詞が現れる。数詞と結びつく単位表現も *Meter*, *Liter*, *Kilo* などの度量衡単位や *Paar*, *Dutzend* などの厳密な数量表現, *Anzahl*, *Menge* などの不定数量表現がある。しかし, これらの数量表現の変異を一応脇に置くと, 次の４種類の組み合わせが可能である。

(4) a. 単数数量句＋単数基礎名詞: ein Kilo Butter [SG]

b. 単数数量句+ 複数基礎名詞: eine Anzahl Studenten } Singular [SG] ?

c. 複数数量句＋単数基礎名詞: zwei Kilo Butter } Plural [PL] ?

d. 複数数量句＋複数基礎名詞: zwei Kilo Äpfel [PL]

結論的には, (4a)の単数数量句＋単数基礎名詞の数は単数[SG], (4d)の複数数量句＋複数基礎名詞の数は複数[PL]であり, どちらが主部なのかという問題は残るが, 区別は単純である。問題になるのが, (4b)の単数数量句＋複数基礎名詞, (4c)の複数数量句＋単数基礎名詞が単数になるか複数になるかという区別である。以下, これらの問題を見ていこう。

２．数量句・基礎名詞複合表現の主部はどれか？

２．１　標準文法の見方

まず, 数量句＋基礎名詞を含む名詞句全体で数を決めるのはどれか, 即ち, 何が名詞句の主部かという構造が問題になる。これに関し, 幾つかの文法書では数量句が数を決める中心だと把握する(Helbig/Buscha 2001, Duden 1984, Götz/Hess-Lüttich 1999)。しかし, Web を見ても実際の用法では揺れがあり, 話し言葉では基礎名詞の数に引きずられた用法も多い。これら標準ドイツ語文法の記述をまとめると, 概略以下の(5)のようになる：

(5) 標準ドイツ語文法の記述： 数量句＋基礎名詞では数量句が文法数を規定する。基礎名詞が主語・動詞の数の一致を決める場合もあるが, これは文法数ではなく, Synesis (意味による一致)に従うもので, 話し言葉の現象である(Duden 2006 等)。

しかし, 対象とすべきは規範文法ではなく, 現代ドイツ語の話者の文法である。ここで話し言葉とされるのは現代ドイツ語文法の揺れを反映するものである。問題は, どのような場合に Synesis と見られる現象が起きるのか, その理由は何かを分析することである。

歴史的に見れば, この表現は中高ドイツ語や初期新高ドイツ語で使われていた部分属格(partitiver Genitiv =「～中の一部」の意)を用いた複合表現が元であったと推定できる。

(6) zehen Pfund silbers　(Behagel 1923, Bd. I, S.487, Luther)

er tranc eines wazzeres (Mhd. =„er trank etwas Wasser“; Mettke 1983, S. 215)

通常の属格と同じく, 後続属格名詞が前の数量句を修飾する, 即ち数量句が名詞句の主部を形成した(現代では無冠詞の名詞単独の属格形は稀である)。また, 言語比較の観点から英語やフランス語などの類似表現を比べても, 同様の属格・前置詞表現が中心である。

(7) three pounds of meat (drei Pfund von Fleisch に対応) un verre de vin (ein Glas von Wein)

属格的(前置詞的)表現による結合の方が古く,これが複合名詞表現の元だとすると, 基礎名詞ではなく, 数量句の方が名詞句全体の中心として意識されるのも当然である。

他方, 同格(Apposition)表現一般について見ても, 同格的な要素は, 元々主部の右側に現れ, 右側から左の主部要素を修飾することが一般的である。

(8) Fritz, mein Freund aus der Studienzeit　(Duden Grammatik 1985)

Karl der Große　wir Studenten　ein Kilo Tomaten

我々は日本語の「1 キロのトマト」のような類推から, *ein Kilo Tomaten* の主部は *Tomaten* と考えがちだが, ドイツ語の同格表現の主部は数量句, 即ち,「トマト 1 キロ分」である。

以上のように，歴史的な部分属格，他の言語の類似表現，同格の修飾関係から類推すると，規範的標準文法が(5)で定義しているように，数量句が名詞句全体の主部であるという見方は，きわめて常識的な流れであると結論できるだろう。

２．２　基礎名詞＝主部への揺れ ― 複合数量表現の統語構造

しかし，数量句＋基礎名詞句は普通の同格表現とは性質が異なる。通常の同格表現では，同格で現れる修飾句は付加部にすぎず，名詞句の文法的性質・意味を変えるものではない。しかし，同格的数量表現では，数量句も基礎名詞も主部としての特徴をもちうる。

(9) a. A bottle of wine broke. (ワインのビンが 1 本割れた：*bottle* が主部)

b. A bottle of wine spilled. (ビン 1 本のワインがこぼれた：*wine* が主部)

(10) a. Zehn Liter $_{[PL]}$ Wein $_{[SG]}$ **war**$_{[SG]}$/**waren**$_{[PL]}$ im Kühlschrank. (Krifka 1989)

b. Ein Kilogramm $_{[SG]}$ Erbsen $_{[PL]}$ **war**$_{[SG]}$/**waren**$_{[PL]}$ in der Vorratskammer.

英語のように前置詞 *of* によって従属関係が明確な場合でも，(9b)のように，*wine*，つまり，名詞句主部が *of* の目的語である基礎名詞である場合がある。同様に，ドイツ語でも(10a, b)のように，動詞の数の一致は数量句でも基礎名詞でも可能である。

どのような時に揺れが生じるかは後で見るが，ここでは複合名詞句の主部と修飾句の統語的関係が２通りあることを確認したい。(10)のような複合名詞句の構造分析については諸説あるが，ここでは数量句が主部である構造と，基礎名詞が主部である構造を次のように仮定する。(11)では数量単位 Q=*Liter* が主部である(QP＝数量詞句)。数詞が数量詞句全体の数を決定する。*von* 前置詞句の場合も似た構造である。(12)では逆に名詞 *Wein* が主部であり，数量詞句 *zehn Liter* はその名詞を限定する。数詞は数量詞句 QP の中に留まっていて，QP は形容詞のような修飾語になっており，名詞句全体に影響を及ぼすことはない[1]。

(11) [$_{QP}$ zehn [$_{Q'}$ [$_{Q}$ Liter] [$_{NP}$ Wein]]]　　(数量表現 *Liter* が主部 [PL])

[$_{QP}$ ein [$_{Q'}$ [$_{Q}$ Korb] [$_{PP}$ von roten Äpfeln]]]

(12) [$_{NP}$ [$_{N'}$ [$_{QP}$ zehn [$_{Q}$ Liter]] [$_{N}$ Wein]]]　　(基礎名詞 *Wein* が主部 [SG])

３．単数数量句＋複数名詞

次に，„eine Anzahl Studenten“のような単数数量句＋複数名詞を具体的に考察する。単数数量句＋複数名詞に関して，Helbig/Buscha (2001)は，(13)のように述べている。

(13) Wird das Subjekt repräsentiert durch eine Mengenangabe im Singular (z. B. *Dutzend*, *Menge*,

Zahl, *Anzahl*, *Reihe*) in Verbindung mit einem weiteren Substantiv im Plural, so kann die finite Verbform sowohl im Singular als auch im Plural stehen. (Helbig/Buscha 2001; 538)

単数数量句＋複数名詞が主語である場合，動詞の一致は単数でも複数でもよいとされる。

Duden (1985)も，このような動詞の数の一致における揺れを指摘している。

(14) a. Eine Menge faule Äpfel lag/lag**en** unter dem Baum. (Duden 1985; 407)

b. Eine Reihe Studenten war/war**en** bereits Mitglied. (ibid.; 415)

Duden (1985)は，(14a, b)について，「Anzahl, Bande, Dutzend, Gruppe, Hälfte, Handvoll, Haufen, Heer, Herde, Kreis, Masse, Mehrzahl, Menge, Million, Paar, Reigen, Reihe, Schar, Schock, Teil, Truppe, Unmasse, Volk, Zahl など単数の集合概念の後に，*Äpfel* のように数えられる物が複数形で現れる時，定動詞は大抵は単数」と述べる。(15a, b)の例を参照されたい。しかし同時に，「数えられる対象が度量表現と同じ格で同格として現れる場合や，不定数量表現で現れる場合，定動詞は複数になることもある。話者は意味に従って数を一致させる」とも述べている(例は(15c, d))。つまり，同格の場合は単数も複数も可能ということになる。実際，複数形の用法は，*rund* や *etwa* といった不定の数量を指示する語が添えられた，(16a-c)のようなコーパスの実例で動詞が複数になることからも裏付けられるかのようにみえる(IDS, COSMAS II コーパスから)。

(15) a. Ein Dutzend Eier (= 12 Stück) kostet 3, 70 Mark. (Duden 1985; 407) [SG]

b. Eine Handvoll Fehler in einem Text von zwei Seiten ist nicht akzeptabel. [SG]

c. Ein Dutzend Angestellte (=unbestimmter Menge) hatten die Arbeit übernommen. [PL]

d. Eine Menge faule Äpfel lagen unter dem Baum. [PL]

(16) a. Rund ein Dutzend Interessenten nahmen teil. [PL]

(Mannheimer Morgen (=MM), 06.07.2004)

b. Nach dem Anschlag hatten etwa ein Dutzend Opfer Schadenersatzansprüche bei der TUI geltend gemacht. [PL] (MM, 28.10.2004)

c. Lediglich etwa ein Dutzend Menschen mussten leicht verletzt ins Krankenhaus, [...]

[PL] (MM, 26.11.2004)

しかし，例えば (17a-c)では動詞は単数形で，このような分析はすぐに問題にぶつかる。

(17) a. Rund ein dutzend Kinder schaute ihr gebannt zu, [...] [SG] (MM, 29.10.2004)

b. Rund ein Dutzend Zuhörer konnte Hüseyin Ertunc im Namen des Europäischen

Jugendförderungsprogramm YEPP […]　[SG] (MM, 17.09.2004)

c. Bevor Jörg Haider kam, zog etwa ein Dutzend Jungsozialisten mit Transparenten und Trillerpfeifen auf.　[SG] (Kleine Zeitung, 17.09.2000)

結局, 「正確な数を表す数量表現(*Dutzend* など)」や「不定の量を表す名詞」といった説明も単数数量句＋複数名詞の動詞の数の問題を解明できない。上の説明から窺えるのは, これら二つの可能性の基準が, 一方で規範文法的な記述であり, 他方そこから外れる揺れを「意味に従う」という条件で片付けていることである。そのため, Synesis と言われる現象の理由は依然として分析されないままに残されている。

一方, Helbig/Buscha (2001)は, 動詞の数の一致の違いを, (18)のように説明する。

(18) In der Regel steht das finite Verb im Singular, wenn es sich stärker auf die Mengenangabe bezieht und die Menge als ungegliedert empfunden wird; es steht dagegen meist im Plural, wenn es sich stärker auf das folgende Substantiv bezieht und die Menge als gegliedert empfunden wird. (下線部強調は吉田・筒井による)

つまり, 動詞と単数数量句の関係が強く, 区切りのないまとまりとして数量が意識されると, 動詞は単数一致し, 逆に基礎名詞との関係が強く, 区切りがある数量と感じられると複数になる。これを Helbig/Buscha (2001)の例で示すと, (19)のようにまとめられる。

(19) a. 数量を区切り(境界)のない一つのまとまりと意識 → 定動詞は単数一致

例： Eine Menge Kohlen **wird** geliefert.　[SG]　(石炭の多量のかたまり)

b. 数量を区切り(境界)のあるものと意識 → 定動詞は複数一致

例： Eine Menge Bücher **wurden** gekauft.　[PL]　(多数の本の複数個体)

ここでは動詞との関連で, 複数名詞の意味的概念が問題となる。Helbig/Buscha (2001)によれば, „Bücher werden – im Unterschied zu Kohlen – normalerweise als Einzelexemplare gekauft.“とされ, 書物のように個別に買う対象であるならば, 区切りのある個別的見方を受けて複数化する。一方, 通常, 区切りがなく個別的扱いを受けない石炭(Kohle)の場合には, 動詞は単数の数量表現と強く結びついて単数になるという。しかし, この説明も上の(17a-c)のような単数例では問題になる。*Kinder*, *Zuhörer*, *Jungsotialisten* など, 複数の人間を表す名詞(＝有生物)を, 複数にはなるが物質名詞に近い *Kohlen*(＝無生物)と同じ土俵において「区切りなし＝単数」と単純にとらえることができるのだろうか？

そこでドイツ語母語話者の直観を確かめるため, 母語話者 7 名に調査した(広島大教員 2

名，留学生 5 名(ハンブルク 3，グラーツ 2)。内容は文(19a, b)についての数の判断である。

(20) ドイツ語母語話者の直観　(HB= Helbig/Buscha 2001)

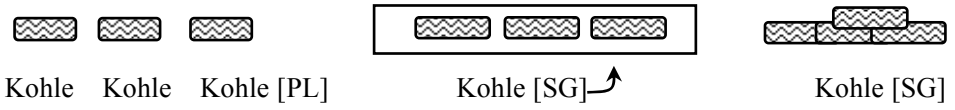
- 文(19a)
  - 単数 2 名　理由: 数量句が *eine Menge* である→ HB 文法の見方と一致
  - 複数 5 名　理由 1: 名詞が *Kohle* ではなく *Kohlen* と複数であるため
    理由 2: 日常会話(話し言葉) → HB 文法の見方とは不一致
- 文(19b)
  - 単数 5 名　理由:　数量句が *eine Menge* である→ HB 文法の見方と一致
  - 複数 2 名　理由 1: 名詞が *Bücher* と複数になっているため
    理由 2: 日常会話(話し言葉) → HB 文法の見方とは不一致

人数が 7 名と少ないが，それでも *Kohlen*(石炭)は複数一致が多く，*Bücher*(本)は単数一致が多かったことは予測に反する現象であり，このような揺れは Helbig/Buscha (2001)の見方を打ち消すものである。そこで，まだ仮説段階だが，この揺れの理由を独自に考察する。

0 節で見たように，均質性(液体・固体等)や，個別単位性といった対象物の存在論的性質は，指示対象の可算性・数の決定の一つの要因だが，他の要因もある。可算・不可算，単数・複数の形態特性にも一定の役割があり，場合によって形態特性と存在論的特性が一致しない場合がある。ここでどちらに比重を置くかが揺れの一因となる。また，名詞が複数形で表示されても，動詞によって複数個体を一単位として見る集合的(kollektiv)な見方も，別々の事象とみる分配的(distributiv)な見方も可能である(Helbig/Buscha の geglierdert/ungegliedert と似た概念)。他方，単数でありながら意味的には「多数」を表すズレをもつような数量句の特殊性も考える必要がある。つまり，基礎名詞と数量句の相互作用である。

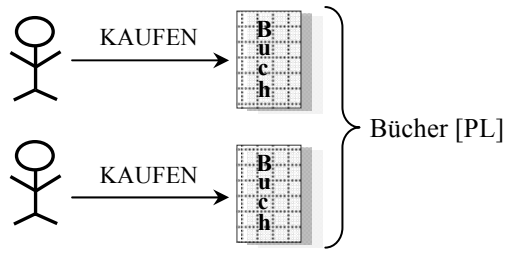
母語話者の「名詞が *Kohle* (*eine Menge Kohle* [SG])ではなく *Kohlen* と複数」という意見に注目すると，(19a)の 5 名[PL]は，「石炭」を図(21a)のように「個別的(可算的)」に捉えており(事実，*Kohle* は可算名詞)，その基礎名詞が *Kohlen* と複数になっているため，動詞が複数になると捉えていると思われる(形態特性の重視)。一方，Helbig/Buscha の *Kohlen* に関する見方は，(21b)のように，個々の対象を一つの集合(kollektiv)として捉えた結果，単数と認知したものと考えられる(個別単位はあるが，外の集合を一つと把握)。また，„eine Menge Kohle [SG]“という意見は，(21c)のように，*Kohle* を「非個別的(一つのかたまり)」に見た結果であり，存在論的に物質名詞＝単数として捉えているものと思われる[2]。

(21a)　　(21b) → 集合的　　(21c)

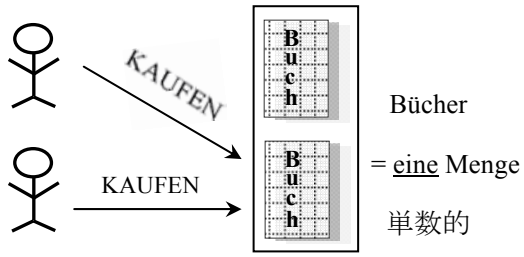


次は *Bücher* の場合だが, (19b)の 2 名の[PL]は, 「本」のように可算名詞であることが明白で, 個別的に捉えやすい対象が複数で表示されるため, 動詞も複数になると考えているのだろう。これは図(22)のように, 個々の対象を分配的(distributiv)に捉えることで,「買う」事象も分配的になり, 動詞が複数になる。一方, 複数の本でも *eine Menge* によって集合的に包括すれば, 一つのかたまりになり, 図(22')のように「一つの事象＝動詞が単数」となる。

(22)「分配的」



(22')「集合的」



この仮説によって, 数量句＋基礎名詞(複数)構造で, 基礎名詞に焦点が当たる時, その名詞が個別的に捉えられれば, 動詞は複数になる。しかし, これでもなぜ基礎名詞に焦点が当てられるのか, 即ち, なぜ「基礎名詞＝主部」への傾斜が生じるかは説明できない。一つの案として, 母語話者の「どちらも日常会話では複数」という直観がヒントになる。日常会話で「基礎名詞＝主部」の見方が生じやすいとすれば, それは逆に, 数量句が限定詞的・形容詞的な働きに後景化しているということである。実際, 幾つかの辞書では「『多数の人々』を意味する *eine Menge* は日常会話で複数扱いとされる」と指摘されている。

(23) a. Eine Menge junger Leute warteten auf der Straße. (クラウン独和辞典)

b. Eine Menge haben sich bereits gemeldet. (小学館独和大辞典)

(23b)の *eine Menge* = [PL](人々)の用法は, *eine Menge Leute* の基礎名詞省略に依拠し, 動作主としての人間が典型的に個別的に解釈されることによって複数読みが生じる。その際, *eine Menge* は, *Viele sind gekommen* と同様に限定詞として意識され, [eine Menge] = [viele] と等価となり, 単数 *eine* は背景化する。ここで[eine Menge N]= [viele N]と意識されるかどうかは, 後続の基礎名詞の意味素性と関係する。おそらくそこには(24)のような名詞句指示に関する個別性の意味階層が関連すると仮定される（Corbett (2000)の有生性階層と類似)。

(24) 個別性の意味階層：人間 ＞哺乳動物 ＞それ以外の生物 ＞人工物 ＞自然物

自然物である *Kohle* は本来個別的に捉えられないもの(物質名詞的)だが, Helbig/Buscha (2001)の例では, *eine Menge Kohle**n***[PL](複数形が有標的)であることから, 個別読みが際立

った結果, *eine Menge* も限定詞に格下げされる。以上をまとめると次のようになる。

(25) <u>まとめ</u>**(仮説):** 単数数量句＋複数名詞における複数一致は，数量句に続く基礎名詞(*Leute*, *Bücher* 等)の個別性の高さに基づき，日常会話において数量句＝限定詞の認識が高まることが原因(の一つ)である。本来個別性が低い対象(*Kohle* 等)でも，それが複数形で現れると，個別読みが誘発され, [数量句＝限定詞]の意識が高まる。

４．複数数量句＋単数名詞

次に „zwei Kilo Butter“のような複数数量句＋単数名詞を考察する。Duden (1985; 409)は,「複数の数詞と *Kilo*, *Gramm*, *Pfund*, *Meter*, *Liter* 等があり,単数物質名詞が続く場合，一般に動詞は複数になる」と述べる。また, Duden (2006; 1021)でも，複数数量句＋単数名詞における定動詞は標準的には複数であると言う [3]。これは数量句を主部とする統語構造からは当然の予測である。しかし，話し言葉では単数も容認されるとも指摘している。

(26) a. [100 *g* [Kavier]] *kosten* viel.　b. [Drei *Meter* [Seide]] *reichen* für dieses Kleid aus.

c. 200 Gramm Fleisch *war*/*waren* für diese Mahlzeit vorgesehen. (Helbig/Buscha 2001)

コーパス(COSMAS II: W-Archiv der geschriebenen Sprache; 書き言葉)においても，「複数数量句＋単数名詞(物質名詞)」で，動詞が複数になる例が多数見られる。

(27) a. 250 Gramm Butter <u>kosten</u> in Österreich derzeit 21, 90 S, in Deutschland hingegen nur 14 S. (Salzburger Nachrichten, 07.04.1994)

b. In einem Liter <u>sind</u> 340 Gramm Salz gelöst.(Oberösterreichische Nachrichten, 14.09.1996)

しかし，次の(28a-d)のように動詞が単数になる例がかなり見られるのも事実である。

(28) a. 375 g Butter <u>wird</u> zu Sahne gerührt, dann [...] (home.arcor.de/kleinr.dorf/rezepte.htm)

b. 150 Gramm Zucker <u>wird</u> zuerst in einem trockenen Topf erhitzt, bis er schmilzt. (www.sh-nordsee.de/service/markttipps/markttipps3.html)

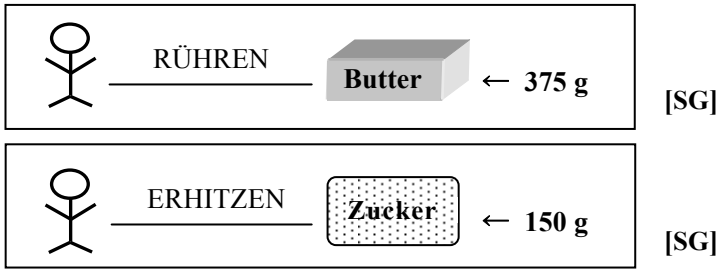
c. 500 Liter Bier <u>ist</u> eindeutig zu viel [...]. (www.norwegen.no/business/news/)

d. 3918155800 Liter Wein <u>ist</u> freilich auch schon was. (www.weindepot-gietzen.de/html/)

なぜ「複数数量句＋単数名詞」で「基礎名詞＝主部」への揺れが生じるかは Duden その他でも説明はない。まだ分析の糸口だが，次の点が考えられる。まず，(28)など，単数例の多くが料理のレシピの記述であり，文は受動態である。また，それ以外で現れる度量衡単位では *Liter* が多く，名詞が *Bier*, *Wein*, *Wasser* など(均質的な)<u>液体</u>である点が目立つ。レシピの場合，素材として「何(Butter/Zucker/Mehl usw.)」を扱うかが重要であり，その対象物を量

が修飾していると考えられる。受動態で対象を主語とするのも素材を浮き立たせるためである。例えば, (28a)の *375 Gramm Butter* の解釈は, 「バターの 375 グラムの数量」ではなく, 「375 グラムの量のバター」であり, 対象そのものが焦点である。ここで, 対象が不可算の物質名詞であることから動詞が単数扱い[SG]となる。

(29)



図(29)のように, それぞれの材料が一つのまとまりとして認知され, その結果, 数量句が(*viel Zucker* のように)限定詞的に働き, 単数一致になるものと考えられる。

次に, 同じ度量衡単位でも *Meter* と *Liter* (28c, d)とでは, その解釈の仕方が異なるように思われる。上記の調査(20)で挙げたドイツ語母語話者(7 名)は, „3 Meter Stoff sind (statt: ist)“と答え, コーパスの例からも「複数の数＋度量衡単位 *Meter*」では, 動詞が複数になる頻度が高いと考えられる。この現象は「標準文法の見方」と一致する。

(30) a. Rund acht Meter Stoff werden für einen Kilt benötigt, [...]

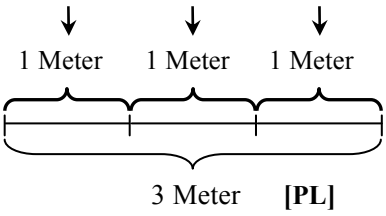
(Neue Kronen-Zeitung, 12.07.1997)

b. Bunte 850 Meter Stoff verzierten am Dienstag die Grazer Innenstadt.

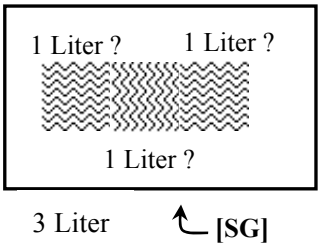
(Neue Kronen-Zeitung, 17.06.1998, S. 13;)

Meter は, 図(31)のように固体の対象を固定した直線単位で測る際に使用される。それに対し, *Liter* は同じ数量であっても測定する対象の形は定まらない。このことは, この度量衡単位が適用される対象が液体であることに起因する(32a, a’)。両者は, 物質=モノを測るという点で共通してはいるものの, *Meter* は個別的・分配的(distributiv)に捉えられるのに対し, *Liter* は数と単位が「一体(Einheit)(cf. Duden (1985))＝一つのもの」として捉えられる傾向があるように思われる(同じ数量単位でも数に関する意味論的解釈が異なる)。

(31)

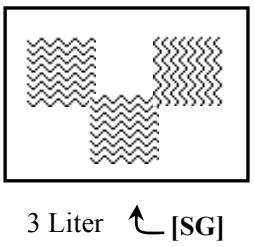


(32a)



=

(32a’)



これは，まだ分析としては仮説にすぎず，他の現象も視野に入れなければならないが，現段階のまとめとして以下の点を挙げておく。

(33) **まとめ(仮説):**「複数数量句＋単数名詞」における「標準文法の見方」との不一致は，①(特にレシピで)対象の数量よりも，何を扱うのかという対象自体に焦点が置かれる，②液体と関係する度量衡単位 *Liter* では，数量句が「一体」として捉えられる傾向が強いことが原因であると考えられる(名詞指示対象の均質性⇒数量単位の単一性)。

(33)の傾向①や②が広がることによって，新しい文法体系が生じる可能性もある。

５．結論に代えて

数量句の数と基礎名詞の数が一致しない場合，標準(規範)文法としては，主部としての数量句の数を名詞句の数ととらえる。しかし，基礎名詞の指示対象の個別性の強さ・弱さ(均質的一体性)や，数量句の限定詞化，数量単位の把握との相互作用によって，基礎名詞の数に基づく一致現象も起こることを見た。最後に，以上の考察を表にまとめる。

(34)

	標準文法の見方と一致	標準文法の見方との不一致	不一致の理由(仮説)
単数数量句＋複数名詞(可算名詞)	[SG] 数量句＝主部	[PL] 基礎名詞＝主部	数量句に後続する基礎名詞の個別性に基づいて，日常会話における[eine Menge] = [viele]の限定詞的な捉え方がなされる。
複数数量句＋単数名詞(物質名詞)	[PL] 数量句＝主部	[SG] 基礎名詞＝主部	1. (レシピ等において)扱われる対象(物質名詞)の数量よりも，対象自体に焦点が置かれる。
		[SG] 数量句＝主部	2.「液体」と関係する度量衡単位 *Liter* では，数量句が「一体」として捉えられやすい。

注

* 本論は第 55 回日本独文学会中国四国支部研究発表会(2006 年 11 月 4 日，鳥取大学)にて筆者らが行った研究発表に基づく。会場で頂いた質問・意見に心から感謝したい。

1 ドイツ語の数量名詞句の統語構造については, Krifka (1989), Löbel (1986), Bhatt (1990), Löbel (1990)を，英語の数量句の構造については Selkirk (1977)を参照されたい。

2 尋ねた母語話者達が，このように *Kohle* を物質名詞的に捉えていることから, *Kohle* が限りな

く物質名詞に近い可算名詞である点は興味深い。これはいわば**偽可算名詞(pseud-count noun)**である(*Vieh* や *Lebensmittel* のような偽物質名詞(pseud-mass noun)の考え方に拠る)。なお，物質名詞・複数名詞の意味論的分析は, Quine (1960), Krifka (1989), Krifka (1991), Link (1991)などが詳しいが，本稿では紙幅の都合上意味論的な掘り下げはできない。

3 「複数数量句＋単数名詞(物質名詞)」における数の一致の分析としては，①個別性のない物質名詞との複合に基づき，動詞の数は必ず数量句の数に誘引される，②動詞意味(事象)に従って規定される，③度量衡単位 *Meter* などの解釈の仕方などが考えられるが，本稿では，これらの結果として「標準文法と一致」する考え方の詳しい分析は割愛する。

・参考文献

Bhatt, C. (1990): *Die syntaktische Struktur der Nominalphrase im Deutschen*. Tübingen (Narr).

Behagel, O. (1923): *Deutsche Syntax*. Band I, Heidelberg. (Carl Winter).

Corbett, G.G. (2000): *Number*. Cambridge. (Cambridge Univ. Press).

Götze, L./ Hess-Lüttich, E. W. B. (1999): *Grammatik der Deutschen Sprache: Sprachsystem und Sprachgebrauch.* Güthersloh, München. (Bertelsmann Lexikon Verlag).

Helbig, G./ Buscha, J. (2001): *Die Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht.* Berlin/München. (Langenscheidt KG).

Krifka, M. (1989): *Nominalreferenz und Zeitkonstitution*. München. (Fink).

Krifka, M. (1991): *Massennomina* In: Stechow, A.v./Wunderlich, D., 399-417.

Link, G. (1991): *Plural*. In: Stechow, A.v./Wunderlich, D., 418-440.

Löbel, E. (1986): *Apposition und Komposition in der Quantifizierung*. Tübingen. (Niemeyer).

Löbel, E. (1990): D und Q als funktionale Kategorien in der Nominalphrase. *Linguistische Berichte* 127, 232-264.

Mettke, H. (1983): *Mittelhochdeutsche Grammatik*. Leipzig. (VEB).

Quine, W.V.O. (1960): *Word and Object*. (ことばと対象)　Cambridge, Mass.: (MIT Press).

Selkirk, E. (1977): Some remarks on noun phrase structure. In: *Formal Syntax*, P. Cullicover, T. Wasow and A. Akmajian. (eds.), 285-316. New York. (Academic Press).

Stechow, A.v./Wunderlich, D. (1991): (Hgg.) *Semantik: Ein internationales Handbuch der zeitgenössischen Forschung.* Berlin. (de Gruyter).

・文法書

DUDEN (1985): Richtiges und gutes Deutsch. Mannheim. (Duden Verlag).

DUDEN (2006): Grammatik der deutschen Gegenwartssprache[7]. (Duden Verlag).

・辞書

DUDEN (1997): *Deutsches Universalwörterbuch neu.* (Duden Verlag).

国松浩二他(編著) (1990):「独和大辞典」(小学館).

信岡資生(編集) (2006):「クラウン独和辞典」(三省堂).

・コーパス

COSMAS II: Korpus des *Instituts für Deutsche Sprache*, Mannheim. (http://www.ids-mannheim.de/cosmas2/, besucht Okt. 2006).

Zwei Kilo Mehl (sind/ist) viel zu viel für den Teig. – Wie lässt sich der Numerus einer komplexen Nominalphrase (Mengenangabe+Bezugsnomen) bestimmen?

Mitsunobu YOSHIDA/Tomoya TSUTSUI

Auch für Muttersprachler des Deutschen ist es manchmal schwer zu entscheiden, ob das Verb im Singular oder im Plural steht, wenn das Subjekt aus einer komplexen Nominalphrase besteht wie „eine Menge Äpfel“ bzw. „zwei Kilo Mehl“, wobei der Numerus der Mengenangabe und der des Bezugsnomens nicht übereinstimmen. In diesem Aufsatz geht es darum, Schwankungen und Mechanismen der Numeruskongruenz bei dieser Art komplexer Nominalphrasen aufgrund von Umfragen und Korpusanalysen zu untersuchen. Standardgrammatiken wie DUDEN(1985, 2006), Helbig/Buscha (2001) usw. behaupten, dass das Verb in der Regel mit einer Mengenangabe wie „zwei Kilo“ kongruiert, da diese der Kopf der Nominalphrase ist. Andererseits weisen sie jedoch darauf hin, dass das appositive Bezugsnomen eventuell den Numerus des Verbs determiniert, ohne aber eine plausible Erklärung dafür zu geben. Wir haben daher Umfragen mit deutschen Muttersprachlern und Korpusanalysen (Web-Daten und IDS-Korpora) in Bezug auf komplexe Nominalphrasen durchgeführt. Daraus hat sich ergeben, dass bei der Nicht-Standard-Kongruenz das Bezugsnomen - je nachdem, inwiefern das Referenzobjekt als eine individuelle Einheit angesehen werden kann - als Kopf der Nominalphrase betrachtet wird, während die Mengenangabe selber als modifizierender Determinator („*eine Menge*“ = „*viele*“) gilt, und dass eine plurale Mengenangabe wie „drei Liter“ semantisch als Einheit interpretiert wird und dadurch den Singular erfordert.